

東南アジアの植民地化

◎東南アジアの植民地化について、教えてください。

大航海時代、ポルトガルがマラッカとモルッカ諸島、スペインがフィリピンを占領したのが、植民地化の始まりです。続いて、新教国のオランダとイギリスが来航。オランダ東インド会社は、まずポルトガル人を追い払い、続いてイギリス東インド会社との抗争(アンボイナ事件)に勝利して、香辛料貿易を独占。ジャワ島のバタヴィア(現ジャカルタ)に総督府を置き、マレー半島・スマトラ島・ジャワ島・モルッカ諸島を含む広大な地域を、オランダ領東インドとして統治します。

イギリスはいったんインドへ撤退しますが、19世紀初頭、ナポレオン戦争を口実にオランダと開戦。ウィーン会議ではケープ植民地(南アフリカ)とセイロン島(スリランカ)を獲得し、さらに英蘭協定を結んでマラッカ海峡に国境を引き、マレー半島(現マレーシア)をイギリスが、スマトラ島からモルッカ諸島まで(現インドネシア)をオランダが支配することで合意します。

マレー半島にはイスラム教徒の小王国が分立していました。イギリス東インド会社のラッフルズは、半島最南端のジョホール王国からシンガポールという島を買収。ここを自由貿易港としたため、中国商人(華僑)がどんどん移住してきて、イギリス・中国間の中継貿易基地として、急速に発展します。このシンガポールと、ペナン、マラッカを合わせてイギリス領海峡植民地と呼びます。さらにマレー半島で錫すず鉱山が発見されたため、イギリスはイスラム小王国を次々に保護国化し、ついには半島全体が英領マラヤ連邦となりました。錫鉱山の労働者として中国人労働者(苦力)が、また天然ゴムの農園労働者としてインド人労働者が流入し、現在の多民族国家マレーシアが形成されていきます。

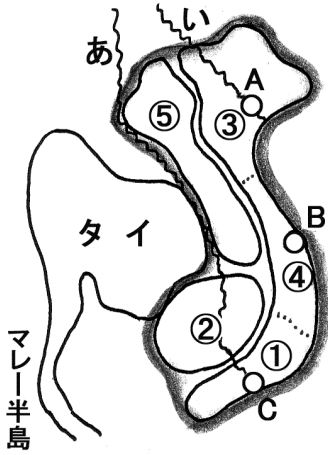
イギリスに敗れたオランダは、ジャワ島民の抵抗(ジャワ戦争)、オランダ本国に対するベルギー独立戦争で財政難に苦しみ、植民地からの収奪を強化します。総督ファン=デン=ボスは、ジャワ農民に対し、土地の5分の1でコーヒー・サトウキビ・藍あゐを作らせ、安い価格で買い上げる強制栽培制度を実施したため、ジャワでは米不足から飢饉がおこりました。ここでも、徴税請負人として利益を得たのは華僑です。華僑は、「オランダ人の手先」としてジャワ人から恨まれます。

最後にやってきたのはフランスです。ナポレオン3世は、メコン川をさかのぼる中国貿易ルートに注目し、アロー戦争に便乗して艦隊を派遣、阮朝ヴェトナムを破り、メコン川河口のコーチシナ東部3省を獲得(サイゴン条約)。フランス艦隊はメコン川をさかのぼって、カンボジアを保護国とします。さらに、仏越戦争に勝利してトンキン・アンナンを占領。フエ条約(仏語でフエ条約)を結び、阮朝ヴェトナムを保護国化。これに反発した清朝(西太后政権)も、清仏戦争で敗北し、天津条約でヴェトナムへの宗主権を放棄しました。フランスは、コーチシナ・カンボジア・トンキン・アンナンをまとめて仏領インドシナ連邦とし、ハノイにインドシナ総督府を置きます。のち、タイからラオスを奪い、インドシナ連邦に編入しました。

この間、インドを植民地化したイギリスは、国境を接するコンバウン朝ビルマ(ミャンマー)を侵略し、3度におよぶビルマ戦争でコンバウン朝は滅亡、ビルマは英領インド帝国に併合されます。この英領ビルマと、仏領インドシナにはさまれていたのがタイのラタナコーシン朝(バンコク朝)です。ラーマ5世(チュロンコン大王)は、英・仏の対立を利用しつつ、たくみな外交で独立を守りました。こうして、アジアの独立国は、東アジアでは日本だけ、東南アジアではタイだけとなりました。

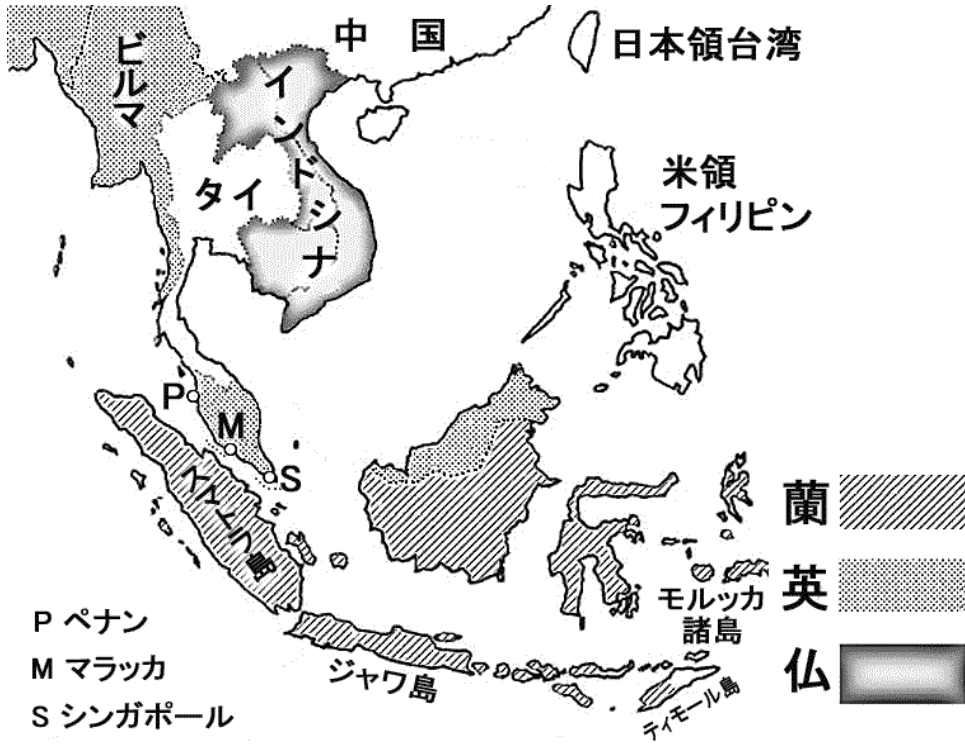
(071224 更新)

仏のインドシナ支配



- ① コーチシナ東部3省
- ② カンボジア
- ③ トンキン
- ④ アンナン
- ⑤ ラオス
- A ハノイ
- B ユエ(フエ)
- C サイゴン
- あ メコン川
- い ソンコイ川

○ 仏領インドシナ連邦



- P ペナン
- M マラッカ
- S シンガポール

- 蘭
- 英
- 仏

東南アジアの独立

◎ヴェトナムの独立運動について、教えてください。

ヴェトナムを占領したフランスは、ハノイに総督府を置き、フエの**阮げん朝**の国王を傀儡かいらいとして植民地支配を行ないました。フランス人の総督に抵抗する王もいましたが、すべて捕らえられ、北アフリカの仏植民地アルジェリアに流刑されました。ヴェトナム人の反仏運動を弾圧するために、パリからギロチンが運ばれました。当時のフランスは**第三共和政**でしたが、本国で実現された自由と民主主義、普通選挙は、植民地では完全に無視されました。「学校よりも多くの監獄を建てた」というフランスの恐怖政治の前に、ヴェトナム人は恐れ、戦う気力もなくなっていました。そんなとき、「日露戦争で日本勝利！」のニュースが伝わります。



ファン=ボイ=チャウ

ファン=ボイ=チャウは阮朝に仕える貴族の出身でしたが、フランスに抵抗するため日本の明治維新に学ぶ、という**維新会**を組織し、ヴェトナム留学生を日本へ送り、近代化を学ばせるという**東遊(ドンズー)運動**を推進します。これに協力する大隈重信のような政治家もいて、数百人のヴェトナム留学生が日本に密航して来ました。清朝の康有為(変法運動)や、朝鮮の金玉均(開化派)と同じですね。

これを知ったフランスは、日本政府に圧力をかけ、仏からの借款の提供と引きかえに、日本はヴェトナム人留学生を追放するという、日仏協約を結ばせました。日本政府は帝国主義フランスの側に立ち、これで東遊運動はむなしく終わります。

青年教師だった**ホー=チ=ミン**は、フランス本国を見てやろうと思い、定期船の住み込みのコックとしてフランスへ渡り、はじめてフランス人労働者たちと接触しました。ヴェトナムにいるフランス人はヴェトナム人を人間扱いしませんでしたが、ホーがフランス本国で出会ったフランス人労働者たちは、ヴェトナム人の彼を、同じ労働者階級の同志として扱いました。「万国の労働者、団結せよ！」というわけです。これに感激し、共産党に入党した彼は、モスクワにおもむいてレーニンと会見。中国の広州で、コミンテルンのヴェトナム支部として**ヴェトナム青年革命同志会**(のちの**ヴェトナム労働党**)を結成します。

◎どうして中国の広州なんですか？

ヴェトナムに帰国すると逮捕されるからです。そして、ちょうどこの頃、孫文が第一次国共合作をすすめていたので、これに便乗したわけです(ヴェトナムの知識人は漢文の読み書きができました)。ところが蒋介石が上海クーデタを起こしたため、ホーらヴェトナムの革命家たちは、いったん姿をくらまします。その後、日中戦争、**日本軍のインドシナ進駐**のどさくさまぎれに、中国・ヴェトナム国境の山岳地帯に本拠地を移して**ヴェトナム独立同盟(ヴェトミン)**というゲリラ組織をつくり、日本軍・フランス軍に対する抵抗運動を開始します。



ホー=チ=ミン

日本が敗北した 1945 年9月、ハノイを解放したホー=チ=ミンは**ヴェトナム民主共和国(北ヴェトナム)**の独立を宣言します。しかし、「自由と民主主義のためにファシズムと戦った連合国が、ヴェトナム独立を認めないはずがないと信じる」というヴェトナム独立宣言は、フランスによって無視されました。植民地復活を目指すフランスは、阮朝の最後の王バオ=ダイ(保大帝)を再び利用してサイゴンに傀儡政権「ヴェトナム国(南ヴェトナム)」を擁立。ホー=チ=ミンが率いる北ヴェトナムとの間で、**インドシナ戦争(1946-)**が始

まります。

フランス兵は、やっとドイツとの戦争が終わったと思ったら今度はベトナムへ送られ、何のために戦っているのかわからず、士気はあがりません。一方、北ベトナム軍の武器は貧弱でしたが、「フランス帝国主義からのベトナム解放」という大義があり、ベトナムの一般民衆を味方につけ、ゲリラ戦でフランス軍を苦しめました。正規軍はゲリラ戦には勝てません。最終決戦は、ハノイの西方、ラオス国境の盆地で行なわれた**ディエンビエンフーの戦い(1954)**でした。ここに飛行場を作って一気にハノイを攻略しようとするフランス軍を、北ベトナム軍が包囲して猛攻撃を加え、ついに降伏させたのです。とはいえ、北ベトナム軍にはサイゴンのバオ=ダイ政権を倒すだけの力もありません。そこで、**ジュネーヴ休戦協定(1954)**では、

- ①**北緯17度線**を休戦ラインとし、フランス軍は撤退。
- ②2年以内に**南北統一選挙**を実施する

ことが決まりました。選挙をすれば、バオ=ダイではなく民衆の支持を受けるホー=チ=ミンが勝つことは明らかですから、インドシナ戦争は北ベトナムの勝利に終わったわけです。しかし、この直後に南ベトナムでクーデタが発生、バオ=ダイを追放した**ゴ=ディン=ディエム**が大統領となり、ジュネーヴ休戦協定を破棄し、選挙はしない、と宣言します。このクーデタを計画し、資金提唱したのがアメリカのCIA（中央情報局）でした。

アイゼンハワー大統領の国務長官**ダレス**は、「対ソ巻き返し」、「ドミノ理論」を唱えました。「ひとつの国(ベトナム)が共産化すれば、ドミノ倒しのように周囲の国々が共産化し、全東南アジアがソ連・中国の支配下に入る。だから、最初のドミノを倒してはいけない」という理屈です。「アメリカは東南アジアの自由を守るため、共産主義と戦う。ベトナムで選挙をすれば、共産主義者が勝つ。だから選挙をしてはいけない」…自由を守るため選挙をしないという珍妙な理論ですが、アメリカの言う「自由」とは、いつも「親米政権」という意味です。

南ベトナム国内では、ゴ大統領の独裁に反対する共産主義者・自由主義者・仏教徒が連帯して、「**南ベトナム解放民族戦線**」を組織、武装闘争を始めます。北ベトナムはラオス・カンボジアの共産党を通して、南の解放戦線に武器を送り(ホー=チ=ミン・ルート)、内戦は次第に激化。アメリカは役に立たないゴ大統領を見捨て、南ベトナムの軍部にクーデタをおこさせて、この軍事政権からの要請という形で米軍の派遣をはじめます。

ベトナムをどうするのかについては、アメリカの政権内部で対立があったようです。ケネディ大統領は、「米軍を送っても送らなくても、同じ結果になるだろう。自分が再選されたら、南ベトナムから米軍を撤退させるつもりだ」といっています。そのケネディが何者かに暗殺され(1963)、あとを継いだ**ジョンソン**が、大規模なベトナム介入を始めるのです。米海軍の艦船が北ベトナム領海を審判し、北ベトナム軍に攻撃された**トンキン湾事件**について、ジョンソン政権は「わが艦船は公海上にいた」とウソの発表をし、議会はジョンソン大統領に全権を与える「トンキン湾決議」を採択。沖縄の嘉手納^{かてな}基地からB52戦略爆撃機が飛び立ち、北ベトナム空爆(**北爆 ほくぼく**)を開始。**ベトナム戦争(1965-)**の始まりです。

ベトナム戦争は、米兵6万、ベトナム人360万の死者をだし、ホー=チ=ミンも戦争中に亡くなりますが、北ベトナムは屈しません。「侵略者アメリカと戦う」という大義があるからです。大義なき戦争に疲れ果てたアメリカ国内では、財政赤字と激しい反戦運動が起こり、「ベトナム戦争終結」を公約した**ニクソン**大統領は、中国を訪問して北ベトナム支援をやめさせ、**パリ和平協定(1973)**を結んで米軍を撤退させました。ニクソンは南ベトナムに自力で戦わせようとしたのですが、その後も北ベトナム

ムの攻勢は止まらず、2年後にサイゴンが陥落、南ベトナムは崩壊(1975)、南北が統一され**ベトナム社会主義共和国**となりました。20年前に選挙をやっていたら、血を流さずに同じ結果になったはず。まったく、無意味な戦争でした。

中ソ対立が激化する中、ニクソン訪中を「中国の裏切り」と非難するベトナムはソ連に接近、一方の中国はカンボジアを支援。ベトナムの**カンボジア侵攻(1979)**と中国のベトナム侵攻(**中越戦争1970**)は、中ソの代理戦争でした。ソ連がゴルバチョフ改革(ペレストロイカ)を始めると、ベトナムも刷新(**ドイ=モイ**)政策と称して市場経済を取り入れ、いまでは中国同様に政治は共産主義(一党独裁)、経済は市場経済という体制です。

◎インドネシアについて教えてください。

中世ジャワの王が、こういう予言をしています。「我らの子孫は長い間、白い人々に支配される。そのあと黄色い人々が支配するが、その期間はトウモロコシの寿命と同じである。そのあと真に独立できる日がやってくる…」



スカルノ

インドネシアは16世紀以来400年間、オランダ領東インドとよばれていました。最初は香辛料、1830年以降は**コーヒー豆・サトウキビ・藍あいの強制裁培**。ジャワ戦争、スマトラのアチー戦争など抵抗運動はことごとく鎮圧されました。民族主義者の**スカルノ**は、**インドネシア国民党**を組織しましたが、逮捕・投獄され、獄中で日本軍上陸の報を聞いたのです。

1941年末、ハワイ真珠湾攻撃と同時に日本軍は東南アジアの植民地へ侵攻します。特に石油を産出するインドネシアの占領は重要でした。日本軍はオランダからのインドネシア解放を呼びかけて上陸を開始、スカルノらを釈放して軍政に協力させます。400年間この地に居座っていたオランダ軍が、わずか1週間で日本軍に敗れたのをみたスカルノは、日本の力を利用しようと考えます。若者たちは日本軍に軍事訓練を受け、日本軍に協力し、独立の機会を待ちます。スカルノは東京で開かれた大東亜会議に出席し、東条首相と会見。大戦末期に日本政府は、1945年9月のインドネシア独立を約束します。

しかし約束の1か月前、1945年の8月に日本は降伏。あわてたスカルノはインドネシア独立宣言を発表し、再上陸をはじめたオランダ軍との間で、独立戦争が始まります。インドネシア軍の武器は日本製、独立軍に加わった日本兵も千人以上います。4年後、**ハーグ協定**でオランダ軍は撤退。ここに人口2億人の巨大国家インドネシア共和国が成立しました。日本の「大東亜戦争」の当初の目的は、東南アジアに眠る石油などの地下資源を確保するためであり、「大東亜共栄圏」はそのための宣伝でした。しかし日本軍の占領が、**結果的にヨーロッパ列強による東南アジア植民地支配を崩壊させた**のも事実です。この戦争がなければ、20世紀の後半まで植民地は残ったでしょう。

◎あの戦争は侵略戦争じゃなかったんですか？

中国に対しては紛れもなく侵略戦争、東南アジアに対しては解放戦争と侵略戦争の二つの性格、米英に対しては帝国主義列強同士の覇権争いとするのが正しいと、私は考えます。すべて物事は、単純に白か、黒かと、決め付けることはできません。

さて、インドシナ戦争がフランスの敗北に終わった1954年、アジアは希望に満ちていました。中国の周恩来とインドのネルーが平和五原則を発表、翌年、インドネシアのスカルノが**第1回アジア・アフリカ**

会議(バンドン会議)を開催。いまだイギリス植民地であるマレーシアはインドネシアの一部だ！と宣言します。マラッカ海峡を確保したいイギリスは、マレーシアに親英政権を樹立して独立国としたため、これを認めないインドネシア軍とマレーシア軍がサバ・サラワク州で衝突。さらにマレーシアが国連に加盟し、安保理の非常任理事国に選ばれると、インドネシアはこれに抗議して国連を脱退、同じく国連非加盟の中華人民共和国に接近します。

スカルノ大統領の反米英・親中国政策は、国内を分裂されました。それまでスカルノを支えていたのは、民族主義者(右翼)Nas、イスラム各派(宗教勢力)Agma、共産党 Kom、の3つの柱で、この3派連合政権を**ナサコム(Nasakom)**と呼びます。ところが、スカルノがだんだん Kom に接近していくことに対して、Nas の**スハルト**将軍が不満をつのらせます。ここに目をつけたのがアメリカです。



アメリカから見れば、石油を産し、マラッカ海峡に接する東南アジア最大の国家が、毛沢東やホー=チ=ミンと親しい「アカ(共産主義者)」のスカルノに支配されているというのは、許しがたいことでした。1965年、ヴェトナム戦争を發動したジョンソン政権は、同年にCIAを使って**スハルトのクーデタ(九・三〇事件)**を支援します。この事件の真相は、今でもよくわかりません。共産党が先にクーデタを起こしたという説もあります。でも、事件の結果はこうです。共産党の壊滅、共産主義者と見なされた人々の虐殺、スカルノ大統領の失脚、以後30年続くスハルト独裁体制の発足。

インドネシアは国連に復帰し、マレーシアと国交を結び、**ASEAN(東南アジア諸国連合)**の中核となり、米英との関係改善でばく大な外資が流れ込み、石油輸出で国民生活は豊かになりました。その引きかえに、言論の自由はなく、スハルトの支持政党(ゴルカル党)が万年与党として国会を牛耳り、民主派や少数民族には容赦ない弾圧が加えられました。日本政府も石油確保の目的からスハルト政権を支持し、ばく大な経済援助(ODA)を与え続けました。このスハルト政権や韓国の朴正熙政権のように、強力な独裁体制で経済復興をはかる体制のことを、**開発独裁**といいます。この開発独裁の問題点は、豊かになったあとも独裁政権が居座ってしまうことです。

冷戦終結は、インドネシアにも大きな衝撃を与えました。米国のクリントン政権は、「反共の防波堤」としてこれまでずっと甘やかしてきた開発独裁政権を、見捨てることにしたのです。欧米の投資会社(ヘッジファンド)が仕掛けた通貨ルピアの大暴落に始まる**通貨危機**と大規模な反政府デモの発生により**スハルト大統領は辞任(1998)**。30年ぶりに自由な選挙が行なわれ、インドネシアは民主化されました。2001年には初代スカルノの娘メガワティが大統領になっています。しかし、東ティモール紛争など、今まで封印されてきた問題が一気に噴出してきました。

◎東ティモール紛争について教えてください。

ゴルバチョフがソヴィエト連邦を民主化した結果、それまで封印されていた少数民族の独立運動が噴出し、連邦の解体を引き起こしました。同じことが、今インドネシアで起こりつつあるのです。

モルッカ諸島(香料諸島)の南にあるティモール島は、日本の東北地方と同じくらいの多きさの細長い島です。大航海時代に、東半分はポルトガル領、西半分がオランダ領として分割されました。ポルトガルは宣教師を送り込んで東部の住民を**カトリックに改宗**させましたが、カルヴァン派のオランダは布教に熱心でなく、西部の住民はイスラムの信仰を守りました。オランダからインドネシアが独立したとき、西ティモールは何の問題もなくインドネシアの一部となりましたが、**東ティモールはポルトガル領のまま**でした。1975年にポルトガルが撤退するとき、東ティモールの住民は、「自分たちはカトリックなので、イスラム国家インドネシアには入りたくない、独立する」といったのです。ところがスハルト独裁

政権は、住民の意向を無視して東ティモールを併合しました。その理由は…

石油です。海底油田があるのです。ロシアがチェチェンを手放さないのと同じです。スハルト退陣後、国連の監視下でようやく民主選挙が求められ、2002年に東ティモールは独立しました。でも、これでおわりではありません。モルッカ諸島の独立運動、スマトラ北部のアチー独立運動は現在もくすぶっています。多民族国家が民主化すると、必ずこういう結果になるのです。中国が民主化できないのも、同じ理由です。

◎カンボジアの内戦について教えてください。

現代のカンボジアは、中世のアンコール朝の残骸です。インドシナ半島の大半を支配する大国だったアンコール朝は、西からタイ人に、東からヴェトナム人に領土を奪われ、19世紀末には、ヴェトナムと一緒にされてフランス領インドシナに組み込まれました。このような歴史がカンボジア人に強烈な反ヴェトナム感情を植え付け、このことがカンボジア現代史を考える上で重要な点です。



シアヌーク

インドシナ戦争を終わらせた**ジュネーヴ協定**で、カンボジアはラオスとともにフランスから独立しました。国家元首となった**シアヌーク**王子はヴェトナムから距離をおき、ヴェトナム戦争が始まっても、南北いずれにも加担せず、中立を宣言します。しかし、国内には親中国派の**共産党**(赤いクメール 仏語で**クメール=ルージュ**)と、親米右派の軍部が対立していました。共産党は北ヴェトナムの武器を南ヴェトナムの解放民族戦線に送る「ホー=チミン=ルート」で活動しました。これを知った米国は、「シアヌークが共産党に甘いからこうなる」と考え、新米右派の**ロン=ノル将軍**にクーデタを起こさせます(1970)。

追放されたシアヌークは、ロン=ノル親米政権を倒すため、共産党の**ポル=ポト**を利用します。ここから、ロン=ノル vs.ポル=ポトの第1次内戦が始まりました。米軍の撤退と南ヴェトナム崩壊で勢いづいたポル=ポトは、ロン=ノル政権を打倒して共産党政権「**民主カンボジア**」の樹立を宣言します。人々は内戦終結を喜び、共産軍を歓迎しましたが、本当の地獄はここからでした。



ポル=ポト

ポル=ポトは、都市の住民に対し、「米軍の空爆があるから農村に避難せよ」と命令します。しかし空爆はなく、そのまま「新住民」=都市の住民は、「旧住民」=農村の住民の監視下におかれ、朝4時から夜9時までの強制労働に従事させられたのです。ポル=ポトは、中国の大躍進運動を見て感激し、全国民が平等に土地を耕す完全な共産主義社会の実現を夢見ていました。彼ほど純粋な共産主義者はいなかったでしょう。彼は、従来の資本主義システムを全廃するため、銀行・企業・貨幣・学校・家庭を廃止、5歳以上の子どもたちは合宿させて洗脳をほどこし、「腐敗した大人たちを監視せよ」と命令します。親の顔も忘れた子どもたちが、棍棒を手に持って大人たちを監視し、党に不満を持つ大人たちを容赦なく処刑したのです。中国の紅衛兵と同じです。

無茶な五か年計画が大失敗に終わると、ポル=ポトは国内の「敵」にその責任を負わせます。これも毛沢東と同じです。旧ロン=ノル政権の軍人・官僚がまず粛清され、続いて文化人・大学教授・教師・大学生など知識人が粛清され、最後には文字の読めるものはすべて粛清の対象となりました。眼鏡をかけているだけで殺されたのです。新しいカンボジアには資本主義の知識はいらない、と考えたのです。のちにヴェトナムが発表した数字によれば、ポル=ポト時代の死者は250万人。これは全人口の4分の1です。さらに粛清の嵐は、党内に及びます。

ヴェトナム国境を守っていたヘン=サムリンの一派は、ポル=ポトに疑われたことを知ると、敵のヴェトナムに亡命し、助けを求めました。ニクソン訪中のときに中国と断交し、ソ連の援助を受けていたヴェトナムは、新中国派のポル=ポト政権を倒す絶好のチャンスと考えます。こうして**ヴェトナム軍がカンボジアに侵攻**(1979)、あわてた中国は、「ヴェトナムを懲罰する」といってヴェトナムに侵攻します(**中越戦争**)。こうして、第2次内戦がはじまったのです。今度は中・ソの代理戦争となり、カンボジア全土に地雷がばらまかれ、ポル=ポトの虐殺を生き残った人々は、さらに10年間の内戦で苦しむことになります。

この無意味な内戦は、冷戦が終わり、中・ソが和解してようやく終わりました。国連の監視のもとで選挙が行われ、反ポル=ポト派とシアヌーク派の連合政権が生まれました。日本の自衛隊も、国連中心のカンボジア復興に協力しています。なお、ポル=ポト派は選挙をボイコットしてジャングルに消えましたが、ポル=ポトの死とともに組織は解体し、兵士も投降しました。旧ポル=ポト派の犯罪を裁く裁判は、2007年に始まりました。

◎ビルマはどうなっているのですか。アウン=サン=スー=チーって誰ですか？



イギリス領ビルマでは、1930年代に「我らビルマ人」を意味する**タキン党**が結成され、反英運動が始まります。指導者の**アウン=サン**らは日本に密航して、日本軍に武器を提供され、訓練を受けます。1941年、日本軍とともにビルマに侵攻し、ついに祖国を解放しました。しかし、日本はビルマ独立を認めず、英領インド侵攻計画(インパール作戦)の前線基地として利用します。1944年、インドに攻め込んだ日本軍は国境の山岳地帯で大敗し、逆に英軍がビルマに侵攻します。親日派として弾圧されることを恐れたアウン=サンらは、タキン党を改め**反ファシスト人民民主連盟**と称し、反日に転じます。その代償に、英国に対して戦後のビルマ独立を約束させました。

30代の若さで初代ビルマ首相となったアウン=サンは、その直後にタキン党の同志によって暗殺されます。英国の情報部員が関わっているという説もあり、真相はわかりません。この英雄的な活躍と悲劇的な死により、アウン=サンは神格化されました。

建国直後のビルマで起こったのは民族紛争です。山地が多いビルマには130の少数民族があり、彼らはビルマ族からの独立を図ったのです。とくに、タイ国境のカレン族、シャン族が強力で、隣国タイがこれらを支援したのです。この危機を乗り越えるため、1962年に**ネ=ウィン**将軍が軍事クーデタで独裁政権を樹立し、中国に接近して社会主義を宣言します。左翼の軍事政権というのは珍しいですね。親米王政の隣国タイに対抗するためです。

しかし毛沢東に学んだ五か年計画は大失敗に終わり、国民の不満が高まります。軍事政権は強権政治でこれを封じる一方、ナショナリズムをあおって政権を維持しようとします。正式国名を、英語読みの「ビルマ」から現地語読みの「**ミャンマー**」に変えたのも、その表れです(「**ジャパン**」と呼ぶな、「**ニッポン**」と呼べ、というのと同じ。軍事政権に反対する人たちは、今でもビルマと呼ぶ)。



アウン=サン=スー=チー

やがて、冷戦終結の波がビルマに及びます。88年、民主化デモに押されて、軍事政権はついに自由選挙を約束。このとき野党党首として脚光を浴びたのが、**アウン=サン=スー=チー**でした。あの**アウン=サン**の娘として生まれたスー=チーは、英国人と結婚して国連職員として働いていましたが、祖国の民主化運動を知って帰国し、民衆から熱狂的な歓迎を受けて野党の**国民民主連盟(NLD)**の党首となったのです。

議会選挙は、NLDが80%を獲得して圧勝。スーチーが首相になるはずでした。が、ここで軍部が再びクーデタが起こします。選挙結果を無効と宣言、スーチーを逮捕、市民に銃口を向け、多くの犠牲者を出しました。このクーデタの翌年、中国共産党政権は、天安門事件を引き起こし、ミャンマー軍事政権と同じように、学生・市民に銃口を向けました。

スーチーの自宅軟禁は、いままも続いています。欧米諸国が人権抑圧を非難する一方、中国はインド洋への出口としてミャンマーを重視、軍事政権に対して軍事・経済援助を与え続けました。

2007年、生活必需品の大幅値上げを発表した軍事政権に対し、僧侶・市民が88年以来の大規模な抗議デモを起こしました。この国は上座部仏教なので、基本的に全国民が一度は出家し、僧侶は財産を持たず、食物は民衆からの托鉢たくはつに頼ります。民衆が生活苦で托鉢に応じられなくなったことを知り、僧侶も立ち上がったのです。経典を唱えるだけの平和デモに対し、軍事政権は再び武力弾圧を行い、数千人が逮捕されました。国連は、軍事政権に対する非難決議も出そうとしましたが、中国の反対によりつぶされました。軍事独裁は、まだまだ続きそうです。

(071014 更新)